

待合室

2007(平成19)年1月3日鑑賞(テアトル梅田)

★★★★



監督・脚本＝板倉真琴／出演＝富司純子／寺島しのぶ／ダンカン／あき竹城／斉藤洋介／市川実和子／利重剛／楯真由子／桜井センリ／風見章子（東京テアトル、デジタルサイト配給／2006年日本映画／107分）

第2章

禁じられるほど燃え上がる？

……起承転結もなく、ハイライトシーンもないが、岩手県にある小繫駅の待合室に置かれた「命のノート」を軸として描かれる人間ドラマには感動がいっぱい……。そんな静かな映画で熱演するのは、富司純子と寺島しのぶという芸達者な実の母娘。興行収入55億円の『DEATH NOTE the Last name』の対極にある「命のノート」はなぜ生まれ、なぜ続いているのか、それを1人静かにじっくりと味わいたいものだ。

きっかけは新聞記事から

「映画化のきっかけ」などというものは、世の中どこにでもゴロゴロと転がっているもの。それが形になるかどうかは、どんな素材に誰がどのような形で興味を示し、どのように具体的に動き始めるかによるわけだ。この映画が生まれたきっかけは、2003年2月の朝日新聞に掲載された「“おばちゃん”と“命のノート”」の記事とのこと。

東北地方の小さな町、岩手県二戸郡一戸町に、いわて銀河鉄道（IGR）の小さな繫つなぎ駅がある。その記事のテーマは、小さな繋がりと書くその駅の待合室にいつの頃からか置かれ、「命のノート」と呼ばれるようになった数冊のノート。コトのはじめは、「いつまでもつかわかりませんがとりあえず置いてみます。旅のものより」と誰かが書き残していったノートから。いつしかこのノートには、待合室で休憩をとる旅人がさまざまな思いや悩みを書き綴るようになったらしい。そして、誰に読まれるわけでもないのにそのノートに返事を書き続けていたのが、

小繫駅の前で日用雑貨や酒類を販売する店を営み、みんなからは「おばちゃん」と慕われている夏井和代。

温泉があるわけでもなければ有名な観光地があるわけでもない、こんな雪深い片田舎の駅になぜわざわざ多くの人を訪れるのか？ そして、その人たちが、どんな思いでどんな気持を「命のノート」に書いているのか？ そんな興味で取材され、まとめられた朝日新聞の記事に興味を持ったのが、この映画が映画デビュー作となった板倉真琴監督。とりたててハイライトシーンもないうえ、起承転結をつけたストーリー性も乏しい、こんな雪深い小繫駅の待合室に置かれた「命のノート」の物語を、さて板倉監督はどのように描くのだろうか？

「デスノート」vs. 「命のノート」

2006年の映画界は「邦高洋低」の時代となり、50億円以上の興行収入をあげた邦画は、『ゲド戦記』『LIMIT OF LOVE 海猿』『THE 有頂天ホテル』『日本沈没』『男たちの大和／YAMATO』『DEATH NOTE the Last name』の6本。中でもコミックが原作で若者に大人気の『DEATH NOTE the Last name』は、2部作の後編だがその興行収入は55億円となり、6月に公開された前編の30億円を大幅に上回った。

「デスノート」はある事件をきっかけに「死神」が天才ライトに与えたもので、そのノートに名前を書かれた者は死ぬという物騒なもの……。正と邪の二分論によるゲーム感覚で展開されるそのストーリーは、二転三転、四転五転する面白いものだったが、それに比べれば、この小繫駅の「待合室」に置かれている「命のノート」は、待合室の中で旅人が1人静かに自分の思いや悩みを書き綴っただけの何の変哲もない代物。しかし、そこに書かれている言葉や綴られている文章は、いずれも旅人1人1人が自分を見つめ、しっかりと自分に向かい合う中で書かれたもので、本音、本心を吐露したものばかり。したがって、そこには「デスノート」にはない命の重みが……。

本格的母娘共演は本邦初！

富司純子と寺島しのぶという実の母娘共演は、1月13日公開の『愛ルケ』こと

『愛の流刑地』（06年）でも実現した。しかしこれは、あくまで寺島しのぶと豊川悦司の2人を主人公として描かれる「現代版 阿部定」ともいえるべき新しい愛の形の映画のワンシーンに寺島しのぶの母親役として富司純子が登場するという、限定的な母娘共演だった。しかしこの『待合室』は、現在の和代を富司純子が、そして若き日の和代を寺島しのぶが演ずるというもので、まさに本格的な母娘共演！

岩手県や小繋地方の方言をマスターするだけでも大変だろうが、さすが根っから芸能一家の母娘だけに、その演技力には安定感がある。そして印象的なのは、真冬の豪雪シーンに登場する富司純子と、春のシーンに登場する寺島しのぶのコントラストの見事さ。今回は、今を生きているおばちゃんと「命のノート」との繋がりを描くという大方針の下にたまたま富司純子と寺島しのぶの母娘共演が実現したが、こんな息の合った見事な演技を披露する2人なのだから、その良さを活かした次の企画も誰かの手で是非実現させてほしいもの……。

ノートの中にはさまざまな人間ドラマが……

安定したシリーズものばかり目につくのが近時のハリウッド映画。したがって、その人気がイマイチなのは当然で、映画はやはり企画が命。その点この映画では、待合室に置かれた命のノートの中に書かれた数行の文章の中に、さまざまな人間たちのさまざまな人間ドラマが浮かび上がってくる。その第1は、雪が降り続く小繋駅を歩いて訪れてきた浩一（利重剛）。彼はある日偶然の事故で愛する妻と娘を一挙に失い、喪失感の中、1人北に向かって歩いているらしい。そんな浩一が命のノートに書き残した文章は自殺を予告するようなものだったが、待合室で眠る浩一の元には和代が用意した朝食のおにぎりとおマフラーが……。

浩一と和代はたったそれだけの結びつきだったが、それによって浩一のその後の人生は……？

第2、第3、第4、第5の人間ドラマは……？

第2の人間ドラマは、遠野に住んでいた和代が小繋に嫁いできた時から、家族のようなつき合いが続いている隣人澄江（あき竹城）と康夫（斉藤洋介）夫婦。

康夫は今自分の作品を残すことに執念を燃やすかのように、木彫細工の作業に没頭しているが、それは一体なぜ……？ また、酒をやめた方がいいと知りつつ、好きなようにさせてやりたいと焼酎を切らさなかった妻澄江の思いは……？

第3は、若い頃、小繫駅の待合室で「おばちゃん」を知って以来、時折ここを訪れてくるトラック野郎の梶野（仁科貴）。今日は、おばちゃんと一緒に食べようと思って買ってきた大きなカニを持って、若い助手と共に小繫を訪れてきたが、本当の目的はそれだけ……？

第4は、地元で多感な年頃を迎えている女子高生の晶子（楯真由子）。絵を学びたいので東京の学校へ行くと親に相談したものの、頭からそれを拒絶され、無口になってしまった晶子。彼女は「命のノート」に和代が書く「今はつらくても、頑張っていればいつか必ずいいことがある」という励ましの言葉なんかとても信じられない、と懸命にアピールした。「おばちゃんはホントに信じているの？」という彼女の疑問は、きわめて当然の気持……？

そして第5は、フリーライターとして小繫駅のおばちゃんを取材し、記事にするべく東京からわざわざ訪れてきた由香（市川実和子）。興味本位で訪れてきただけのような彼女は、実はよくここを訪れていた親友が自殺したことにショックを受けて、おばちゃんに会いにきたもの。都会で孤独に暮らし、自殺してしまった親友の姿は、彼女にとって決して他人ゴトではなく、自分自身の姿でもあったわけだ。小繫駅の待合室に置かれた命のノートには、こんなさまざまな人間たちのさまざまな人間ドラマが……。おばちゃんは「命のノート」の中でこんな人たちと向き合う中、それに対してどんな返事を書いているのだろうか？ そしてまた、現実におばちゃんに対して悩みを打ち明ける彼ら彼女らに対して、どんなアドバイスをするのだろうか……？

和代にも大きな人間ドラマが……

和代はもともと母親綾瀬フミ（風見章子）と2人で、遠野に住んでいたもの。根っからの明るい性格の彼女は看護婦の道を選びそれを天職と考えていたが、今日は小繫駅前前で母親と2人で雑貨品を含めた酒類の販売をしている志郎（ダンカン）との見合い話が舞い込み、目下思案中。真面目が取り柄、いやそれしか取り

柄のない志郎のところに嫁いできた和代は、たちまちみんなの人気者となり、子宝にも恵まれ2人は幸せを満喫していた。それが急転したのは、一人娘の和枝が5歳の時の子供祭りの日の死亡事故。さらにその数年後、和代を襲った不幸は、酒もタバコもやらず、ひたすら家業に精を出していた夫の志郎が心臓病で倒れたこと。以降、和代は女手ひとつで店を守り、ただひたすら生きてきたのだった。

そんな彼女の人生哲学(?)は、朝起きてご飯を食べて仕事に励み、風呂に入って寝ることができれば、それだけで人間は十分幸せではないか、ということ。多分、そんな彼女が綴る文章だからこそ、その返事は「命のノート」に書き込んだ人の心に響くのだろう。もっとも、それが多感な女子高生の晶子に理解できないのは当然。人は、それぞれの年齢、立場、経験等によってさまざまな人生観、価値観を持つのが当然だから……。

ラストは和代とその母親の物語……

小繫に嫁いできた和代には、今もおお遠野で1人生活している母親フミがいる。さまざまな人の人生と向き合っている和代は、今日、何年かぶりに店を休みにしてその実家を訪ねた。老いた母親を小繫に誘い、一緒に生活しようと言いにいったわけではないが、老いた母親の姿を見て和代がそう思ったことはたしか。そして、それとなくそんな誘いの言葉を投げかけたが、それを察した母親の返事は「生まれ育った土地は離れられない」とはっきりしたもの……。将来的にどうなるかはわからないものの、今はまだ1人で何とか生きていくことができているわけだから、それはそれでいいだろう。この先どうなるかはその時に考えればいいこと……。そんな風に和代が考えたかどうかは知らないが、とにかく今は、また小繫に戻り、店をしっかりと守り、命のノートに書き綴っていくことが和代の仕事。

そう考えた和代が待合室に戻ってみると、そこには浩一と晶子の2人に大きな変化が……。待合室で2人のそんな劇的な変化を確認した和代は、雪が降り続く中1人お店へ……。さあ、今日はこれで終わり。明日はまた新しい人生が……。

2007(平成19)年1月5日記